



(上)造林・土壌浸食防止のプロジェクトが終了したタリハ県を訪れ、その後の取り組みについて県職員からヒアリング中の名井さん。追加支援の必要性を考慮しながら、しっかりと話し合う



(下) JICA事務所のボリビア人スタッフとミーティング

国際協力はたくさんの方で成り立つもの

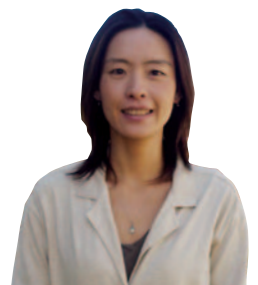
皆さんあつての国際協力。現場での支援を通じてそう実感するJICAボリビア事務所の名井弘美さんは、プロジェクトを支えるさまざまな人々への感謝の気持ちを大切に、日々の業務に当たっている。

高

校時代のコスタリカ留学をきっかけに、中南米に携わる仕事が出来ると考え、ブラジルで事業を行っていた民間企業に入社しました。しかし、中学時代から親の転勤や留学で開発途上国に暮らす機会が多く、日本とは違うその貧しさを肌身で感じていたこともあり、「やはり直接困っている人の役に立ちたい」という思いがわき上がり、この業界に転職したんです。

ボリビアは、国民の60%以上が貧困層で、都市と農村の格差も広がっています。JICAボリビア事務所では、こうした問題を解決し、自立した国づくりをしていけるよう、農業・農村開発、インフラ整備、母子保健、水、教育などの分野で支援を展開しています。その中で私は、プロジェクトの形成や終了後案件のフォローアップを担当しているほか、現場に赴き、事業にかかわる日本人とボリビア人の声を聞きながら、計画の軌道修正、連絡調整なども行っています。技術協力が中心ですが、日本人専門家が常駐していないこともあるため、実施機関と専門家との橋渡し役や、事業の進捗のフォローをするのも業務の一つです。

こうした日々の業務の中で実感しているのは、国際協力は「さまざまな人々の参加があつてこそ成り立つもの」だとい



うこと。現場を引っ張ってくれる専門家に現場にいないとも陰でプロジェクトを支えてくれる日本の協力者、一緒に奮闘するボリビア人スタッフやカウンターパート、地域住民。みんなの力なしでは国際協力は動きません。誰に対しても、感謝の気持ちを忘れないことが大切だと考えています。

昨年からは、毎年雨期に多発する洪水や土砂災害対策として、災害に強い道路や橋の保守体制づくりと、管理・点検方法などの知識・技術を各地へ広められるよう、道路管理局に設置されている「防災ユニット」の能力向上支援も始まりました。当初は、ユニットメンバーのJICAの支援方針・方法に対する理解が十分でなかったため、日本側に頼りつきりて、人任せになっていたこともありました。そのため、正確な理解を促すために、スタッフへ説明の場を設けたんです。共に取り組む全員が同じ認識でプロジェクトの方針や進行状況を把握しなければ、気付けかぬうちに齟齬が生まれ、計画はうまく進みません。私はJICA職員として、できるだけ相手のニーズに応え、質の高い協力を実施していきたい。そのためにも、さまざまなアクターの負担を最小限に抑えられるよう、迅速で柔軟な対応を心掛けています。

JICAボリビア事務所

名井 弘美

NAI Hiromi

大学卒業後、民間企業に就職。4年後に退職し、大学院で国際社会科学を専攻。2002年JICAに就職。JICA大阪、農村開発部を経て、06年12月より現職。

現地の慣習に戸惑うこともあります。ボリビアでは、政治的な理由で、各省の大臣や局長レベルでの

人事異動が頻繁にあります。交代するたびに方針や体制が変わるので、関係づくりや基本合意からやり直さなければならぬ。JICA本部（東京）にいたころは、間接的なやりとりが多く、そのような交代は、現地事務所の職員が対応してくれていたこともあり影響を感じなかったのですが、こちらでは当然ながら直接的なかわり強い。組織としての知識や経験の蓄積をどのように定着させていくか、今も頭を悩ませています。

国際協力は、外交の重要な手段でもあります。地理的に中南米は日本から遠く、なじみが薄いかも知れませんが、多くの日系人が暮らし、食料や資源、環境といった面から見ても、やはり日本の大切なパートナーです。JICAのボリビア支援の現場にも、「皆さんあつてこそ国際協力」の心を広げ、良いパートナーシップを築いていきたいと思えます。



専門家やカウンターパートなど、40人以上の関係者がかわる農村開発のプロジェクト。活動計画や進捗を確認するため、合宿形式で集中的に議論する(左から3人目が名井さん)